断章

旭川のアイヌ語地名研究

㉔

高橋 基

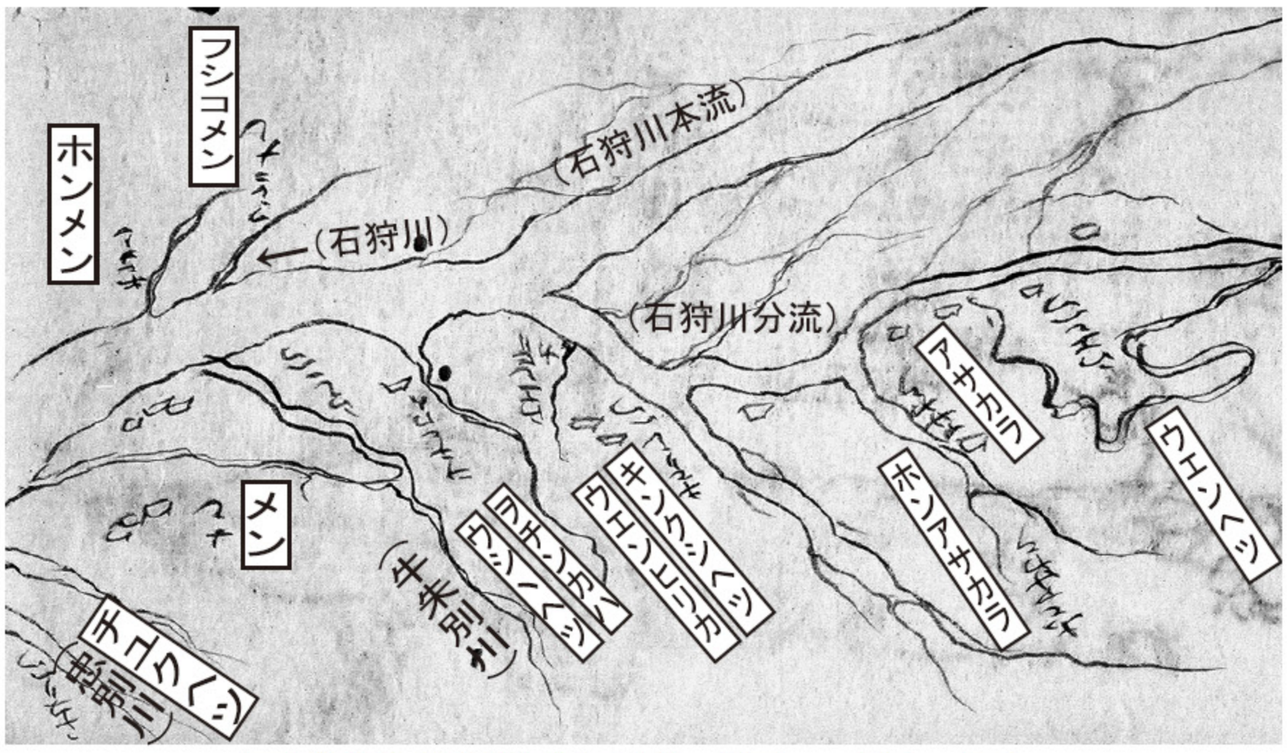
―ポンメムのメム（上）―

松浦武四郎は、安政五年（一八五八年）に、美瑛経由で十勝越えするために、旭川を訪れた。そこで、前回も紹介したポンメムのメムについて、重要な記録を残している。

すなわち、上川のアイヌの人たちは、一軒の家に七、八匹の犬を飼っていて、秋に鮭が上ってくると、小川の浅瀬に上ってくる鮭を、犬がくわえて捕まえ、一軒の家で五、七匹の犬を飼っていると、干鮭（からさけ）を百束（註・二千尾―一束は二十尾）も取り、一人暮らしの老婆でさえ三十束、四十束（六百尾～八百尾）位ずつ取るという。

武四郎は続けて、「其の魚の多きこと筆紙の及ぶ処に有らず」と書き、それ故、天塩、十勝、湧別、渚滑辺の人たちが、飢饉の時は、山越えしてこの上川に来て糊口し、立ち直って帰郷する者が多かったと記している。そのため、比布川口周辺には、天塩出身者の子孫、忠別川川口には、湧別・渚滑出身の子孫、美瑛川・辺別（べべつ）川周辺には十勝出身の子孫が多いと記録している。

さて、松浦武四郎は、「再篙（さいこう）石狩日誌」のダイジェスト版の『石狩日誌』では、右の飼い犬による鮭を捕獲した場所を、前回も紹介したホンメン（ポンメム）のメムとし、犬が浅瀬に飛び込み、鱒を捕獲する様子を述べた上で、「依りて此辺の老婆は犬を大切にし、我が喰する毎に喰を分かち与へ飼置（かいおき）たり。秋味（あきあじ）の比（ころ）は一日に四、五束（註・八十尾～百尾）ヅゝも取獲とかや」と記述している。



写真①松浦武四郎『巳　第二番』

写真②「石狩川川筋図」

この『石狩日誌』のメムの位置に最初に言及したのは、大正三年刊の『鷹栖村史』で、「めむ（今ノ蛇ノ湯温泉付近）」としている。蛇の湯温泉は、当時の近文一線一号区画外で、現在の旭町二条一丁目にあった。続いて大正五年の『神楽村神居村村史』以下に、「メム＝蛇の湯温泉附近説」は孫引きされていく。近年では、『開基一〇〇年記念誌・目で見る旭川の歩み』の「上川アイヌコタン分布図」が、第二十二回に掲載した石狩川右岸のポンメムを松浦武四郎が採録したホンメンのメムとしている。

写真①は、松浦武四郎が、安政四年（一八五七年）の旭川調査に持参した野帳（のちょう）の『巳　第二番』の石狩川の略図で、理解し易いように、石狩川を上にしたもの。△印が人家を表わしている。ご覧のように、右岸には人家の印がないのである。右岸にホンメンがあるが、人家の印がなく、左岸にメン（メム）が書かれて、人家の印がある。ここが犬が鮭をよく捕ったメムである。前回のポロメムで述べたように、ポロメム、ポンメムは、石狩川の左岸にあったのである。

写真②も、松浦武四郎の自筆による石狩川の川筋図である。H印は、人家の印。石狩川の忠別川合流点から、比布川の合流点までの概略図で、右岸に人家があるのは、比布川口のみである。松浦武四郎が調査した時は、比布川口以外は、意外なことに、人家（コタン）は石狩川左岸にのみ集中していたのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します